

ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年

桑山正進

ヒンドゥー教の神神を大理石の丸彫りで表現するという独特な造像が、カーブル周辺やガルデーズからラグマーンに至る東部アフガニスタンでこれまで二十数点知られている[桑山 1990: 308f.]。そのうち考古学の正式な発掘を経たものは Khair Khana 出土品 [Hackin and Carl 1936: Pls. XI-XVI, XXIII-32] と Tapa Skandar 出土品 [Kuwayama 1972: Illus. 1; 1974: Illus. 21] だけである。神像に銘文を彫った例も僅かに 2 例。タパ＝スカンドルのウマー＝マヘーシュヴァラ並坐像(カーブル博物館に現在)と伝ガルデーズ出土ガネーシャ立像(カーブルの Pir Rathan Nath Dargah に現在)(図 1)とである。銘文はいずれも鋭角ブラーフミー字体によるサンスクリト。ウマー＝マヘーシュヴァラ像の銘文はマヘーシュヴァラ(シヴァ)に対する 3 行 84 文字の賛歌 [Yamada 1972; Gupta and Sircar 1972-1973; Mirashi 1975] で、造立に関する年紀を含まない。一方、ガネーシャ立像の銘文は奉献した王 Khimṅāla と年紀「8 年」とを明記する(図 2)。G. Tucci, D. C. Sircar, M. K. Dhavalikar, L. Petech はその王名を論じたが、別の資料にあらわれる同様の王名と混同し、その上大理石像の彫刻としての年代をまったく考慮していないから歴史の文脈で捉えきれていない。いまそれが可能になったのは、同様な名をもつ諸王の編年を行ない、Khimṅāla 王の位置をはっきりさせたからである。すなわち結論は、Khimṅāla とはカーブル河流域を 8 世紀中葉に支配し、A. D. 745 年に Uddyāna 王をはじめて兼ねることになった突厥王朝のひとりの王である。

1. 大理石ヒンドゥー神像の年代

碑銘学者には字体自身の年代さえきまればすべて年代問題は解決といった誤解がままみうけられるが、字体の年代必ずしもそれを含む遺物ないし遺跡年代ではない¹⁾。したがって、ここで銘文の王名を扱うのに先立って、ガネーシャ神像を含む一連のヒンドゥー神像に関して現在ひろく認められている年代を述べておく。

筆者は、1970年までに知見にのぼったすべての神像を整理し、各像間に共有する細部要素が同時代の同地域の佛教彫刻と共通する点に注意を促し、全体に7-8世紀といった年代を考古学の型式論によって与えた[桑山 1972: 1-54; 1976: 375-407]。さらにカーブル河流域における7-8世紀の支配勢力の編年を検討し、これらの世紀は「馨孽王朝」とそれに続く「突厥王朝」の時代に当たることを明らかにした[桑山 1990]。造像の型式論と照合すれば、大理石神像はヒンドゥー教神像ではあるけれども、これらふたつの王朝の時代のものであることが明白である²⁾。この研究[桑山 1976]ののち、像例は若干増加した。G. Verardi は特異なガネーシャ像を公刊[1977: 277-283]、桑山は[桑山 1972]を増補し[1978: 325-384](とくに383頁の後記参照)、また Bernard と Grenet は1980年5月に Khair Khana で偶然に出土し



ガネーシャ立像 大理石 伝ガルデーズ出土

たスーリヤ立像の、ほとんど完璧に残存した優作を細部にわたって検討している[1981: 127-146]。また、タパ=スカンダルのウマー=マヘーシュヴァラと Shakar Darah 出土

のガネーシャをカシュミールのヒンドゥー神像と比較した Pran Gopal Paul は示唆に富む [Paul 1986]。

神像が 7-8 世紀のものであることは容認されたが [Allchin and Hammond 1978 : 289], 上の比較では対象を同地域の佛教像に求めただけで, カーブル河流域に近接する地域のヒンドゥー神像との比較検討はしていない。この点で有益な議論は, Tapa Skandar のウマー=マヘーシュヴァラ像頭部の髻に関するもので, この像に独特な風貌を与える五角形の髻と同形式がスリーナガルの Sri Pratap Singh 博物館の Śiva Trimūrti 像の中央の髻にみられるという, J. Siudmak の私信による指摘である。Siudmak の年代観では, このシヴァ=トリムールティー像は 7 世紀前半である [Siudmak 1989 : 47, Fig. 8]。この貴重な指摘に基づいてほかの大理石像をカシュミールのヒンドゥー神像と比較してみると, とくに Pāndrethān 出土と伝える彫像のなかに, カシュミールのほかのどのヒンドゥー寺院で出土した彫像よりも, 大理石神像に近似する細部が認められる。つまり, タパ=スカンドルのウマー像や Tagāo 出土の Durgā 女神における冠の立飾は, 同博物館蔵の蓮華をもった像 [Siudmak 1989 : 50, Fig. 12] とシヴァ派の神像 [Siudmak 1989 : 50, Fig. 13] との冠とほとんど同じだといってよい。

2. ガネーシャ像銘文の諸解釈

銘文とは台座上部の低い磨研部分に 2 行にわたって彫り込まれたマハーヴィナーヤカ像造立碑文である (図 2)。Sir Mortimer Wheeler がインド考古学調査団として戦後間もなくアフガニスタンを概括的に調査したとき, カーブルの上記寺院にすでに祠られていたこの像を撮影した。T. N. Ramachandran と Y. D. Sharma はその写真をもとに謄写版刷で銘文釈読をおこなった [Ramachandran and Sharma 1956, 筆者未見]。Sircar はこれを使ってさらに詳細に論じた [Sircar 1963 : 44-47]。スワートにおいて 1955 年に考古学調査を開始したトゥッチは調査初回の略報の注において, 当時カーブルにいた Fernando Scorretti 氏から贈られた写真を見解とともに公表した [Tucci 1958 : 327-328]。スワート調査の報告にアフガニスタンの Gardez 出土と伝える神像を公表したのは, その銘文中にスワートの古名 Uḍḍyāna を発見したからである。以下にこれら先学の見解を略述する。

a. Tucci の解釈

[第 1 行] Om saṃvatsare aṣṭatame sam 8 jyeṣṭha-māsa-śukla-pakṣa-tithau
ttrayodaśyām śudi 10-3 rikṣe viśākhe śubhe siṃhe ci..

[第2行] mahat-pratiṣṭhāpitam idaṃ mahāvināyaka-paramabhāṭṭaraka-
mahārājādhirāja-śrī-śāhi-khiṃgalo-tyāna-śāhipadai [h] (花紋)

「第8年ジェーシュタ月の白分の第13日、月宿がヴィシャーカ宮にあって獅子座がかがやく時刻に、この偉大にして美麗なるマハーヴィナーヤカ(像)は、令名あるシャーヒー(王)、傑出したシャーヒー Khimṅala, 最高の君主、諸王の王によって奉納された」と。トゥッチの見解の概略は、(1)「第8年」の紀元を決めることは不可能、(2)字体は5世紀末から6世紀初め、(3)第2行末は khiṃgalo-tyāna, すなわち Utyāna の Khimṅala と読める。(3)がもっとも重要である。Utyāna が Uddyāna であるとすれば、それはインド碑銘における初出であり、また Uddyāna の王名の初現である。さすれば北西インドの歴史上まれにみる重要な資料である。次に重要な問題は王名の Khimṅala である。同様な王名が北西インド史上知られているからである。エフタル銀貨の銘文の Deva Śāhi Khiṅgila (あるいは Khiṅgi) [Cunningham 1962 : 265, 278-279, Pl. VII, Fig. 11] と、*Rājatarāṅgīnī* の Khinkhila Narendrāditya [Stein 1900 : I, 52, Taraṅga 347] である。トゥッチは、銘文の字体からした年代と絡めて、これらすべての王名を単独の王とみる方向を示唆する。トゥッチが F. Scoretta から受領して発表したその写真は、龕に埋め込んで据えた状態を撮影したもので、像全体をみわたせないし、銘文も不鮮明な部分があった。トゥッチがその釈読に際して諸点で明言を避けたのは当然であった。

b. SIRCAR の解釈

インド考古調査団が取得した Archaeological Survey of India 所蔵の写真のうち神像自身の写真 (AFG. ASI Neg. No. 1-56) はトゥッチのものとはほとんどおなじであるが、Ramachandran と Sharma がつけたのは銘文だけを撮った写真であり、比較的鮮明である。これに基づいたサルカルの釈読にトゥッチを更正する諸点がみとめられる。

[第1行] [Siddham] [//*] Sa [ṃ] vatsare aṣṭatame saṃ 8 jyeṣṭha-māsa-śukla-pakṣa-
tilau (thau) ttrayodaśyāṃ śu-di 10-3 ji (ri) k [ṣ] e viśākhe śubhe siṃ [he] chi [traka]

[第2行] mahat pratiṣṭhāpitam idaṃ mahā-vināyaka paramabhāṭṭaraka-
mahārājādhirāja-śrī-śāhi-khiṃgālautyāta-śāhi-padai [h] (花紋)

(英訳 : May it be well! In the eighth year—year 8, on the thirteenth tithi of the bright half of the month of Jyeṣṭha—bright day 13, in the constellation Viśākha (*and*) the auspicious Siṃha (Iagna), this lovely (*and*) big (*image of*) Mahā-Vināyaka has been installed by the illustrious Paramabhāṭṭaraka Mahārājādhirāja Śrī Śāhi Khimṅāla (*alias*) Ōtyāta-śāhi.)

字体は6ないし7世紀に属する Siddhamātrka 字体で、銘文自身は7世紀中葉をくだらない。文字 y がみつつに分れた形は、東インド7世紀初頭の碑銘(例: the Patiakella Plate of Śambhuyaśas [A. D. 602])にあらわれ、またラージャスターンにおいては稀に7世紀末の碑銘(例: the Dhulev Plate of Bhatti [Harṣa 紀元第73年=A. D. 679])にあらわれる。

トゥッチが *khimṅalotyāna śāhi* と読んだ最後の王名部分が問題である。(1) 字母「n」につく母音は「ai」ないしは「o」ではなく正しく「au」である。(2) lau に続くのは *tyāna* ではなく *tyāta* である。字母「n」はただ一回だけ *vināyaka* のなかにあらわれ、その左右両下の出っ張りは「t」よりも短く膨らんでいる。「t」はこの銘文には数回でてくるので「t」と「n」の区別ははっきりしている。よって(3)トゥッチの、*Uḍḍyāna* の王としての *Khimṅala* を疑う。つまり、サルカルは *Khimṅalotyāna Śāhi* と読まず、*Khimṅāla Ōtyāta Śāhi* と読む。*Ōtyāta* は *Khimṅāla* の第二の名、しかも王の支配地域とは関連しない称号である。そのような例を *Gilgit Manuscripts* の中から挙げている。*Paṭoladeva-Śāhi Vajrāditya Nandin*, *Śrī-Deva-Śāhi Surendravikramāditya Nandin*, *Śāhanuśāhi Paṭola-Śāhi Śrī-ṅava-Surendrāditya Nandideva* の三人。これらの王はいずれもふたつの名をもち、7世紀にキシヤンガンガー流域の *Darada* 地方を支配した。(4)この神像自身がスワートからガルデーズへ運ばれた可能性は否定できないが、スワート地方に *śāhi* が存在したという点については疑問。*śāhi* のなかでもっとも強力であったカーピシーやカーブルの *śāhi* の領域中にガルデーズはある。そこをスワートの *śāhi* が占拠しているとは考えられぬ。

c. DHAVALIKAR の解釈

Khimṅāla に関して M. K. Dhavalikar [1971 : 331-336] は、(1) *Rājatarāṅgiṇī* の *Khinkhila Narendrāditya* とここの *Khimṅāla* とは無関係。後者は *śāhi* の名をもってあらわれているが、前者はいわゆる *śāhi* ではなく、カシュミールの王である。(2)しかし、貨幣の *Khingila* との関係は無視できない。貨幣の王の年代は V. Smith [1906 : Pl. XXVII, Fig. 1] によれば5世紀末である。(3)銘文には不確実な点がきわめておおいが、造像様式からはこの神像はおそくとも6世紀はじめである。(4) *Khimṅāla* に実年代を与えることを避けるが、5世紀末から6世紀はじめの *śāhi* のひとりであろう。Dhavalikar の「様式」とはポスト=グプタ期のヒンドゥー教図像に基づくものであり、東部アフガニスタンのほかの大理石神像との関連を考慮していない。

3. 中谷英明教授の新釈

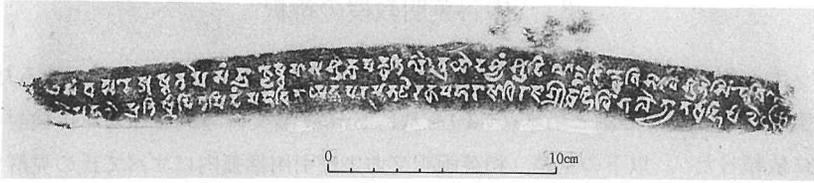
トゥッチとサルカルとでは肝腎の王名と称号との解釈におおきなひらきがあるため、筆者が实地に撮影した写真と拓本(図2)を基に Sircar 論文の写真を加えて再検討を中谷教授に依頼した³⁾。以下の釈読, 和英両訳文および引用括弧内はすべて氏の見解である。

〔第1行〕 *saṃvatsare aṣṭatame saṃ 8 jyeṣṭha-māsa-śukla-pakṣa-tithau ttrayodaśy-āṃ śu. di. 10. 3. rikṣe viśākhe śubhe śimhe (citra-)*

〔第2行〕 *(k)e mahat pratiṣṭhāpitam idaṃ mahā-vināyaka paramabhaṭṭeraka mahārājā-dhirāja-śrī-śāhi-khiṃgālaudyāna-śāhi-pādaiḥ*

(紀元第8年。ジェーシュタ月, 白分第13日, (月の)宿がヴィシャーカー宮にある吉祥なる(日)に, 獅子座が(地平線に)輝く時刻, これなる大ガネーシャ神(の神像)は, 最高の君主, 大王, 諸王の王, オーディヤーナ王キンガーラ王陛下が造らしめた。[英訳] On the 13th of the bright half of the month of Jyeṣṭha, (the day) the (lunar) mansion being the Viśākha, at the auspicious time when the zodiacal sign Lion was bright on the horizon (lagna), in the year 8, this great (image) of the Mahāvināyaka was consecrated by the supreme lord, the great king, the king of the kings, the śrī śāhi Khīṃgāla, the king of Ōḍyāna.)

「まずもっとも肝要なことは, *khiṃgālaudyāna*(=*khiṃgāla-ōḍyāna*)という読みがもっとも自然であることである。この点拓本より写真で判断すると *nyā* よりも *dyā* の方が可能性が高い。つまり *śāhi-khiṃgāla* は *ōḍyāna*(発音上 *udḍyāna* と等価)-*śāhi* ともよばれていた。文字の形をトゥッチは5世紀末から6世紀初め, サルカルは6-7世紀とするが, さらに遅い可能性も否定できない。サルカルの挙げる根拠の中で, 唯一考慮に値するのは「*ya*」の形について述べる点であるが, この碑文に見える「*ya*」と同様の「*ya*」は日本に伝わる貝葉写本にみるように8世紀までつかわれていた証拠がある[梵字貴重資料集成 1980]。全体としてもっとも近いのは, パウワー写本前半部(医学写本部分)および L. Sander [1968] がギルギト=パーミヤーン第2型(G. B. II)とよぶ書体である。パウワー写本の書体は G. B. II の先駆をなし, 6世紀前半に比定され, また G. B. II はのちに Śārada 体へと発展してゆくもので, Sander 自身6-10世紀に同定している。当碑文にはこの両書体のそれぞれにより近い形が混在し, 現在の知識では字体からこれ以上年代を詰めることはできない。字形は慣れたひとが書いたらしく稚拙ではないが, あるべき



ガネーシャ立像銘拓影

線が脱落していたり (tithau の th, śrī の ś), 字形が歪んでいたりにして (rikse の ṛ), 杜撰さは否めない。碑文のサンスクリットには, aṣṭame を aṣṭatame, jyēṣṭhā, を jyēṣṭha, ṛkṣe を rikṣe, vaiśākhe を viśākhe, mahāvīnāyakam を mahāvīnāyaka, paramabhaṭṭāraka を paramabhaṭṭeraka とする誤りがあり, 就中 aṣṭa-tama は彫師のミスではなく, サンスクリット文作者の知識水準を示している。通じて字の彫り方, 文法ともあまり正確ではないが, 紀年の示し方はほかの碑文に較べて詳細であり, 天文暦法の知識の一端を窺わせる。

碑文の年代に関してさらに重要な点は paramabhaṭṭāraka と samvat の問題である。静谷正雄 [1978] のインド碑銘集成を通じて検討した結果, paramabhaṭṭāraka なる語句はクシャーナおよびグプタ時代の碑銘にはどうやら現われず, むしろ頻繁に使われるのはパーラ時代である。この事実は当碑文がグプタ時代に近接するものではなく, それよりも遅れるという事実を示す。一方紀年の「8年」についてはヴィクラマ紀元が候補にのぼってもよいはずである。つまり百年の単位を省略してただ「8年」と書かれたとみる。」

サルカル, 後に筆者があらためて言及する L. Petech [1988 : 187-189] は年紀を「Khimgāla 王の第8年」とみている。この見解を否定しざる証拠はあるはずもないが, 中谷氏によればヴィクラマ紀元, あるいはまた筆者の考えではラウキカ (Laukika) 紀元によるとみること許されるのではないか。神像は考古学上の型式論では, 冒頭にのべたように, 7ないし8世紀に属する, 東部アフガニスタン出土の大理石諸神像と一連のものである。したがってもしヴィクラマ紀元であるとすれば, 年紀の候補として608年 (A. D. 665) と708年 (A. D. 765) がありえ, またラウキカ紀元であれば, 3708年 (A. D. 632/633) と3808年 (A. D. 732/733) が候補になる。中谷氏の読みにしたがって筆者は以下を碑文に認めるものである。すなわち神像銘の「8年」とは, 7世紀ならば665年か632/633年, 8世紀ならば765年か732/733年である。このうちのいずれかの年にマハーヴィナーヤカ像は, 最高の君主, 大王, 諸王の王, Śrī Ṣāhi Khimgāla, Uddyāna Ṣāhi によって奉獻されたことになる。

4. 同様な名をもつ王たちの層位関係

Khingāla の名はエフタル貨幣の Deva Śāhi Khingila や *Rājatarāṅgīnī* の Khinkhila Narendrāditya と混同されてきた。Petech はイスラーム資料と中国資料とにも Khinkhil や Khingal を発見し [1988 : 188-189], イスラーム資料に関しては Habībī も論じている [1363AH : 83-85]。ここと次章とでこれらの王名の年代関係を整理する。

Al-Yaʿqūbī は言う。「al-Mahdī は諸王に服従を呼びかける使者を送った。かれらの多くは服従してきたが、そのなかには KhNKhL と呼ばれるカーブルシャーや... がいた。」 [Taʾrikh : 479] と。al-Mahdī の在位期間は 775-785 年。そのとき服属してきたもののなかに Khinkhil (または Khinjil あるいは Khinjil) とよばれるカーブルシャーがいたのである。

一方、中国資料は、罽賓国王の馨孽 (x [i] āp-jār > *henger), つまり Khingar ないしは Khingal に言及する。顯慶 3 年 (658 年) に罽賓に修鮮都督府を設置すべく派遣された唐朝の特使が伝えたところによると「(罽賓の) 王の始祖は馨孽。いまの (王) 曷擲支 (yar-γ ār-tsiē > *ghar-ilči) に至るまで父子 (相続して) 位を伝えること十二代である」(旧唐書卷 198, 唐会要卷 99, 唐書卷 222 下)。「いまの曷擲支 *ghar-ilči とは 653 年に罽賓の王位を継いだ人である。つまり冊府元龜卷 970 朝貢 3 は、永徽 4 年 (653) 11 月に、「曹国, 罽賓国 (の王) はみな後継ぎがあらたに即位し、それぞれ使いを遣わして朝貢した。」と。この場合罽賓はカーピシーであるから [Lévi and Chavannes 1895; Lévi 1896; Lévi 1897; 白鳥 1917], カーピシーの王朝の始祖が Khingal である⁴⁾。

6 世紀 50 年代後半から 60 年代における突厥のエフタル本拠地 (トハーリスタン) 侵掠は⁵⁾、北西インドのエフタル勢力の分解を促した [Kuwayama 1989]。その空虚に乗じてカーブル河流域の東西 600 キロには夏営地をカーピシー、冬営地をガンダーラとする政権が生起する [桑山 1990 : 第 2 章]。653 年時点で *ghar-ilči に交代したという王統の始祖が Khingal であるという点に基づくと、その 20 年前、630 年の玄奘当時の王もまたこれと同一の王統、Khingal を始祖とする王統に属する。玄奘は大唐西域記卷 1 で、630 年ころのカーピシーの王が刹利種であることを述べる⁶⁾。チャトゥルヴァルナの一、クシャトリヤである。クシャトリヤであるならば、ここにあらわれたカーピシーの王統はエフタルの後裔ではない。653 年時点で 12 代とする点に鑑み、Khingal 王朝は 6 世紀にあらわれたカーピシーの王朝、つまりエフタルの退潮にともなって興起した、いわば汎カーピシー国の土着王朝である。

Khingal はポスト=エフタル時代のカーピシー王であるから、Deva Śāhi Khingila とは同一人物ではない。Deva Śāhi Khingila はエフタル貨幣にあらわれる王名であり、Deva Śāhi Khingila 銘のある貨幣上の王の胸像は、エフタルの一連の貨幣上にあらわされたほかのエフタル王の胸像形式に従っていて、とりわけて型式の断絶はみられないのである。

一方 Khingal 創始の汎カーピシー王朝の貨幣は、従来 Napki Malka ないしは Napki Malek と呼び慣わし、あらたに Göbl が Nspk MLK と読んだ銘をもつ貨幣である。Nspk MLK 銘貨[Göbl 1967: II, 71f.]にはおおきく2群があり、牛頭を頂いた冠をつけた王の胸像をあらわしたもの[Göbl 1967: I, 132f.]と、三日月の上に三叉戟状飾りをのせた冠をつけた王の胸像をあらわしたもの[Göbl 1967: I, 155f.]である⁷⁾。これらのうち前者の冠形式はエフタル王のものと全く異っている。

隋書西域伝の漕国伝が初期のカーピシーに関するまとまった記事であることはすでにあきらかにした[桑山 1975: 93-107; 1990: 165-177]。その漕国王の王冠が牛頭冠である。しかし現行の隋書西域伝は実は牛頭冠ではなく、魚頭冠となっている。これをそのまま冊府元龜卷960が踏襲している。一方、通典卷92の漕国伝と、北史西域伝では牛頭冠である。通典漕国伝の文章は牛頭冠の一句のほかは現行の隋書漕国伝と一致する。北史と通典とに牛頭冠とあるのは、李延壽や杜佑がそれぞれ7, 8世紀の中葉においてつかった隋書が牛頭冠となっていたからであろう⁸⁾。このことは当初の隋書が牛頭冠と記していたことを示唆する⁹⁾。つまりヒンドゥークシュの両側でエフタル勢力が退潮したのち歴史の舞台にあらわれたのがカーピシーであり、その王が被る牛頭冠を描出した Nspk MLK ないし Napki Malka 型貨幣は、とくに Khingal 王にかかわる貨幣なのである。冠形式や王の胸像などの形式の上で、これは Deva Śāhi Khingila 銘を含む一連のエフタル貨幣とはまったく異なる。エフタル貨幣とは形式年代ともに一線を画する。牛頭冠を示した貨幣を発行したのはエフタル王の後裔ではないのである。

一方、*Rājatarangīnī* の Khinkhila Narendrāditya は、編者 Kalhana によれば、Gonandiyā 朝の王であり、ゴーンディヤ朝は Kārkoṭa 朝にはるかに先行する王朝である。カールコタ朝は Durlabhavardhana Prajñāditya にはじまる。カルハナによれば、ラウキカ紀元3677年から3713年、すなわち A. D. 601/602から637/638に王位にあった王である。エフタル退潮の約60年後にカシュミールとカーピシーを通った玄奘と同時代人である。大唐大慈恩寺三蔵法師伝によれば玄奘はカシュミールで Prajñāditya に厚遇され、帰途カーピシーの東都城 Uḍabhāṇḍapura において再会している。スタインは

*Rājatarāṅgīnī*に編纂されたカールコータ朝以前のカシュミール王統には多々混乱があることを認めているのに、なお Khīnkhila Narendrāditya のエフタルとしての歴史性を疑っていない。その理由として、(1)かれの貨幣がある。すなわち Deva Śāhi Khīngila の貨幣である。(2)Khīnkhila は非インド名である。(3)*Rājatarāṅgīnī*はこの王がいくつかの宗教的施与をおこなったと記すと [Stein 1900 : I, 80]。しかし Deva Śāhi Khīngila を Khīnkhila Narendrāditya と同一視できる資料はない。ゴーンナンディヤ朝は、カールコータ朝に先行するから、カールコータ朝と並行するカーピシーの Khīngal 朝に先行し、ガンダーラを中心とするエフタルの時代に相当する。ガンダーラとカシュミールとの両地方に時を同じくして同じような名の王がいたことになる。このことはトーラマーナやミヒラクラについてもいえる。このふたりの王もやはりゴーンナンディヤ朝の王統の中にみえ、ガンダーラでも貨幣の上にあられる。スタインが Khīnkhila と Khīngila を同一視するのは、このゴーンナンディヤ朝とガンダーラのエフタルとを同一視するからである。

*Rājatarāṅgīnī*にカルハナが編纂したゴーンナンディヤ朝以前の王統史はあくまでも伝説を編纂したものであり、これをすべて歴史事実とみるわけにはいかない。スタインは大唐西域記巻4の Takka-deśa の条のミヒラクラ関係記事を歴史事実と認めた上で議論しているようにみえる。ミヒラクラ関係記事とは、「パンジャーブのサーガラ(いまのシールコト)に勢力を張ったミヒラクラがマガダのシーラーディティヤに破れ、助命されたのちにカシュミール王によりカシュミールに封土をあたえられた。しかしカシュミール王を暗殺して、ついで西のガンダーラをその佛教とともに滅ぼした」というもの。唯一の事実は宋雲慧生が実際に見た記事をおいてほかにはないのである。つまり洛陽伽藍記巻5はガンダーラのエフタル王はいまの Jhelum 辺りでカシュミールと520年時点で3年越しの戦争をしているという [Kuwayama 1989 : 95-97]。ジェルムとシールコトとは近接していてこの点だけは大唐西域記のミヒラクラと洛陽伽藍記のエフタル王とをむすびつける雰囲気をもつ。しかし破れたミヒラクラがカシュミールにはいり、カシュミールの王となり、ガンダーラを討伐するなど、到底歴史に還元できない。ガンダーラとカシュミールとの両方にエフタルがいて互いに戦争しているなどは想像を絶する。スタインがいうように *Rājatarāṅgīnī* のゴーンナンディヤ朝の王統や記述は乱れているのであり、カシュミール以外の北西インドの、つまりガンダーラの、エフタルに関する歴史事実と伝説が入り交じってカシュミールの王統史編纂に際して取り込まれたのではなかったか。

5. Uḍḍyāna の Ṣāhi

以上により, Deva Ṣāhi Khingila はエフタル, 中国資料の Khingal はエフタル後のカーピシー Khingal 朝の創始者であることを知った。そうして *Rājatarāṅgiṇī* の Khin-khil はすくなくともカーピシーの Khingal より以前に割り付けられるが, ガンダーラのエフタルとの関わりは不明な点が多いということである。次にガネーシャ碑文中の Khimḡāla と Yaḡqūbī の Khinkhil とが残った問題である。結論を先に述べると, Śrī Ṣāhi Khimḡāla を名とする碑文中の王はおそくとも745年にウッデイヤーナ王を兼ねることになったカーブルシャーのひとりである。

カーピシーの Khingal 朝は7世紀の後半にカーブルを中心とする地方に勢力を蓄えた突厥王朝により篡奪される¹⁰⁾。この王朝は唐史にみるかぎり, 738年をはるかにさかのぼる時点で烏散特勤灑が登位し, 738年はこの王が嫡子佛林罽婆(*vḡər-ljəm-kiäi-bā=Fromo Kesaro [Humbach 1966: 20f.])に老年になったため譲位した年の下限である。すなわち, 開元二十六年十月, 「是月罽賓国王烏散特勤灑以老年上表。請立其嫡子拂林罽婆嗣位。従之。乃封拂林罽婆爲罽賓国王」(冊府元龜外臣部封冊2。なお旧唐書198は開元27年の記事)と。さらにおそくとも745年にはその子である勃匄準(あるいは勃準)が登位した。すなわち旧唐書罽賓国伝, 唐会要卷99, 冊府元龜外臣部封冊3は, 「天宝4載, 745年に, 罽賓国王である拂林罽婆をその子である勃匄準(*bḡər-bjūk-tsiuen 冊府元龜外臣部封冊3では勃準)に継がせ, 罽賓国王および烏長国王とした」と。冊府元龜の冊立文は, 「罽賓国王の嫡男である勃準は以前から(唐の)信義をうけ, 早くより誠を尽くしてきた。……よって冊命して罽賓国王及烏長国王の位を継承させる。……」とあり, 罽賓国王の嫡男である勃準あるいは勃匄準が罽賓国王ばかりでなく, 烏長国をこのときはじめて統括することになったことを明確に述べる。烏長国とはいうまでもなく Uḍḍyāna である。

さきにサルカルの疑問を記した。すなわち, スワートに Ṣāhi が実際に存在したか。また, Ṣāhi 諸家のうちでもっとも強大なカーピシーあるいはカーブルの Ṣāhi の領域にあったはずの Gardez をスワートの Ṣāhi が占拠することがありえたかと。一方, トウッチはガルデズ出土のガネーシャ像に刻まれた Uḍḍyāna は, 碑文におけるはじめての言及であると。実に Uḍḍyāna は, 唐代の史乗にあらわれることすらまれである。唐書西域伝の烏長伝と越底延伝を別にすると, 太宗代の貞観16年(642)に朝貢したという冊府元龜卷970の記事が最初であり, 次はいま述べた記事であり, これが最後である。以上を考慮すると, 碑文の Uḍḍyāna Ṣāhi を Uḍḍyāna においてカーブルの Ṣāhi からまったく独立

した Śāhi と見る必要はまったくない。カーブルの Śāhi が Uddyāna の Śāhi を兼ねたのである。

したがって、ガネーシャ碑文にあらわれた Śrī Śāhi Khimḡāla Uddyāna Śāhi に関してふたつの可能性を挙げることが許される：(1)この王は勃匁準その人である。(2)勃匁準より後の突厥王朝、カーブルシャーのひとりである(勃匁準以後の罽賓王の名は知られていない)。どちらの場合にしても Uddyāna Śāhi の称号をカーブルシャーがとりうる下限は745年であるから、大理石ガネーシャ像の造立にとってこの年次は鍵となる。「8年」に対する絶対年代の四候補のうち、これに該当するのは765年しかない。もし(1)が妥当であるならば、勃匁準は突厥の称号である可能性がある。碑文の Khimḡāla が個人名ならば、勃匁準 bḡer-bjuk-tsiuen から想定されうる原音は Khimḡāla と相容れないからである。つまり Khimḡāla- *bḡer-bjuk-tsiuen はその即位後20年ほどにして Uddyāna 王として大理石マハーヴィナーヤカ像を造立したのであろう。そこで問題になるのは、al-Mahdī 時代(775-785)と同時代の Khinkhil というカーブルシャーである。Uddyāna 王である Śrī Śāhi Khimḡāla とすぐさま同一視できる証拠がないからである。Khinkhil と Khimḡāla- *bḡer-bjuk-tsiuen とが同一人物であるかどうかの問題は、後者がどれほど長く在位したかにかかるといえる。その在位期間についても資料は残されていない。同一人物であるとみる場合に、*bḡer-bjuk-tsiuen の在位がそれでは長すぎるというのであれば、(2)の可能性が考慮されよう。この場合は造立年代である765年と Khinkhil がいた年代である775年-785年とさらに近づく。

最後に付け加えておきたいのは、サルカルやペテクが「8年」を Śrī Śāhi Khimḡāla の第8年とみた点である。もちろんこの可能性は残るのであるけれども、(1)を想定して、第8年の起算年を一応745年とすると、神像の造立年は752年である。(2)を想定すれば、752年以後のある時点である。

注

- 1) たとえば Tapa Sardar でストゥーパ64の立つ泥を叩き固めた床にそれが生乾きのときに刻んだブラーフミー文字によるマントラがある。字体はどう遅く見積っても4世紀であるのに、ストゥーパと床上で出土した土器片、彫刻ははやくとも6世紀である [Kuwayama 1991]。
- 2) ヒンドゥー神像であるから「ヒンドゥー＝シャー朝」に当たるという安易な見解もあった。この王朝は、テュルク系王朝の Lagatūrman から王位を篡奪した Lalliya ないし Kallār というヒンドゥー教を奉じた大臣が創始し、カーブル河流域を Bhīmapāla 王の A. D. 1030年まで支配した。

最近の A. Rahman の Hund Slab Inscription に基づく研究によれば843年の篡奪である [Rahman 1979 : 52, 309-316]。さすれば大理石ヒンドゥー神像の年代は9世紀より11世紀である。

- 3) タパ=スカンダル第3回発掘(1974)の折, 兼松江商のカーブル支店に勤務していたヒンドゥー教徒の案内で, 筆者はこのガネーシャ神像を祀る Pir Rathan Nath Dargah に赴き, ちょうど旧の龕から外されて寺院の内壁に立てかけた状態の神像を観察し, 撮影し, 銘文の拓本を採取する絶好の機会にめぐまれた。永年それを放置しておいたが, 最近筆者は拓本と写真を中谷英明氏に託し, 解説を依頼した。中谷氏はその解釈にコメントを添えて極めて迅速に筆者に教示された。以下にそれを掲載する。筆者は氏に甚深の謝意を表明するものである。
- 4) Petech はここにあらわれた Khingal 等が個人の名ではなく, 王朝名に基づいた名祖 (eponym) であり, 唐史にのみじくも記録されたとおり, カーピシーにおいて代々受け継がれたものとみている。だが *Rājatarāṅgīnī* の Stein 英訳本第1巻52頁の347頌に, 「his [Gokaṛṇa's] son Narendrāditya who bore the second name of Khinkhila consecrated shrines to Bhuteśvara...」とあるように, この場合の Khinkhila は正しく個人名である。同様に, エフタル貨幣の Deva Śāhi たる Khingila も, トーラマーナとかミヒラクラなどの名がエフタル貨幣に知られる以上, これらと同じく一の人格を指している。
- 5) 周書異域伝下嚙嚙国伝: 魏廢帝二年(553)明帝二年(558)並遣使來獻。後為突厥所破。部落分散。職貢遂絶。隋書西域伝挹婁伝: 先時国乱, 突厥遣通設字詰強領其国。
- 6) 敦煌文書中の唐写本, 中尊寺本, 石山寺本は刹利種を宰利種, つまりソグド出身とする。しかし, カーピシーにおけるソグド出身の王とは一体何か。隋書西域伝漕国伝にその王は昭武姓だと。昭武はソグド諸城市の dihqan の姓である。隋書と大唐西域記とは整合するかにみえるが, 隋書は「漕」と「曹」とを混同していることなど, 現行の隋書漕国伝には錯誤があり, この整合は疑問である。「刹利種」を正とする。
- 7) これまで貨幣学者はこの種の貨幣をエフタルの系統としてとらえてきた。エフタル貨幣上にあらわれる *jauvla*, *jabula*, *janbula*, *jabuvlah* を地名と断定して Zabul にあて, エフタルは Zabulistan およびカーピシーをもその支配下においたと考えたからである [Marquart 1901 ; de Morgan 1923-1936 ; Ghirshman 1948 ; Bombaci 1957 ; Göbl 1967 ; Mitchner 1975 ; Wink 1990. など]。しかし, エフタルがトハリスターンからヒンドゥークシュ山脈を越え, 南方のカーピシーやザープリスターンへ侵入して支配した証拠は皆無。また北西インドから西へ, カーピシーやザープリスターンへ支配を伸張した証拠も実はないのである。洛陽伽藍記の宋雲慧生記事や, 魏書西域伝の原文と目される部分のような, エフタルと同時代の漢文資料がつかえるのは, ガンダーラにエフタルが侵入したこと, そうしてこのようなエフタルが, 先行遊牧族キダーラと同じように, トハリスターンから南へではなく南東方向に, カラコルムとヒンドゥークシュ

- との間を経て、北西インドにあらわれたことだけである [Kuwayama 1989 : 109f; 桑山 1990 : 143f.]。これらの貨幣については別誌で整理結果を公表する予定である。
- 8) 8世紀中葉以後のいつか、原隋書は現行隋書に変わってしまったのである。このことは隋書全体についていえるのか、その西域伝だけについていえるのか、はたまた漕国伝だけについてのことか、もとより判明はしない。
- 9) Rémusat は前世紀にすでに漕国の牛頭冠に言及し [Rémusat 1829 : 211], Göbl も注意しているが [Göbl 1967 : I, 135], とくに Göbl は漕国をザーブリストーンとする従来の比定を疑っていないので、牛頭冠にまつわる歴史環境を正しく理解していない。
- 10) 突厥王朝がカーピシーの Khingal 朝と交替した事件はその南方の Zabulistan との関係できわめて重要であるが、中国、イスラームなどの文献、そして貨幣、考古等、資料間の整合を得ることはこれまたなかなかむずかしい問題である。桑山 [1990] は一部これに触れたが、別稿で再論する予定である。

参考文献

Allchin, F. R. and N. Hammond, (ed.)

1978 *The Archaeology of Afghanistan from Earliest Times to the Timurid Period*, London/New York/San Francisco.

Al-Ya'qūbī, *Ta'rikh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden, 1969.

Bernard, P. and F. Grenet

1981 Découverte d'une statue du dieu solaire Surya dans la région de Caboul, *SIr*, 10-1, 127-146.

Bombaci, A

1957 Ghazni, *EW*, 8-3, 247-259.

梵字貴重資料集成刊行会

1980 梵字貴重資料集成, 2巻, 東京美術.

Cunningham, A.

1924 *Ancient Geography of India*, revised by Majumdar, Calcutta.

1962 *Later Indo-Scythians*, Varanasi : Indological Book House.

de Morgan, J.

1923-1936 *Manuel de numismatique orientale de l'antiquité et du moyen age*, 1, Paris.

Dhavalikar, M. K.

1971 A Note on Two Ganeśa Statues from Afghanistan, *EW*, 21-3/4, 331-340.

Ghirshman, R.

1948 *Les chionites-hephthalites, MDFAFA*, 13, Cairo.

Göbl, R.

1967 *Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*, 4 vols., Wiesbaden.

Gupta, P. L. and Sircar, D.C.

1972-1973 Umā-Mahésvara Image Inscription from Skandar (Afghanistan), *Journal of Ancient India History, Calcutta*, 6-1/2, 1-4,

Habībī, A.

1363(AH) *Ta'rikh-e Afghānistān ba'd az Islām*, Tehrān.

Hackin, J. and J. Carl

1936 *Recherches archéologiques au col de Khair Khanah près de Kabul-Fouilles J. Carl et J. Hackin, MDFAFA*, 7, Paris.

Humbach, H.

1966 *Baktrische Sprachdenkmäler*, I, mit Beiträgen von A. Grohmann, Wiesbaden.

桑山正進

1972 大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか, *東方学報*, 京都43, 1-54.

1978 大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか(補訂), *アジア文化史論叢*, 2, 山川出版社.

1990 カーピシー＝ガンダーラ史研究, 京都大学人文科学研究所.

Kuwayama, Sh.

1972 The First Excavation at Tapa Skandar, *Archaeological Survey of Kyoto University in Afghanistan 1970*, Kyoto, 5-14.

1974 Excavations at Tapa Skandar : Second Interim Report, *Kyoto University Archaeological Survey in Afghanistan 1972*, Kyoto, 5-13.

1975 Khair Khaneh and its Chinese Evidence, *Orient*, 11, 93-107.

1976 The Turkī Śāhīs and Relevant Brahmanical Sculptures in Afghanistan, *EW*, 26-3/4, 375-407.

1989 The Hephthalites in Tokharistan and Northwest India, *Zinbun : Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University*, 24, 89-134.

1991 The Horizon of Begram III and Beyond : A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kāpīśī-Kābul-Ghaznī Region, *EW*, 41-1/4, 79-120.

Lévi, S. and E. Chavannes

1895 Note additionelle ; Kipin, situation et historique, in *L'Itinéraire d'Ou-K'ong (751-790)*, *JA*, 9 série, tome 6, 371-384.

Lévi, S.

1896 Note rectificative sur le Ki-pin, *JA*, 9 série, tome 8, 161-162.

1897 Note additionnelle sur les Indo-sythes, *JA*, 9 série, tome 10, 529, fn. 2.

Marquart, J.

1901 *Ēranšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenāci. Abhandlungen der königlichen Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen*, Phil.-Hist. Klasse, Neue Folge, 3-2, Berlin.

Mirashi, V.V.

1975 A Note on the Umā-Maheśvara Image Inscription from Skandar (Afghanistan), *Journal of the Oriental Institute, Baroda*, 25, 155-156.

Mitchner, M.

1975 Who Were Napki Malik ? *EW*, 25-1/2, 167-174.

Paul, P.-G.

1986 *Early Sculpture of Kashmir, Before the Middle of the Eighth Century A. D. : An Approach to Art History and Epigraphy of the Jhelum Valley and its Peripheral Regions*, Amsterdam.

Petech, L.

1988 Note su Kapisi e Zabul, *Selected Papers on Asian History, Serie Orientale Roma*, 60, 187-194.

Rahman, A.

1979 *The Last Two Dynasties of the Śāhis*, Islamabad.

Ramachandran, T. N. and Y. D. Sharma

1956 *Archaeological Reconnaissance in Afghanistan : Preliminary Report of the Indian Archaeological Delegation*, the Cyclostyle Edition, New Delhi.

Rémusat, A.

1829 *Nouveaux mélanges asiatiques*, 1, Paris.

Sachau, E. C.

1888 *Al Beruni's India : An Account of the Religion, Philosophy, Literature, Geography, Chronology, Astronomy, Custom, Laws and Astrology of India*, 2 vols., London.

Sander, L.

1968 Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung, *Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland*, (ed.) W. Voigt, Supplement 8, Wiesbaden.

白鳥庫吉

1917 罽賓国考, 東洋学報, 7-1 (白鳥庫吉全集, 第6卷, 岩波書店, 東京, 1970, 350-359).

Sircar, D. C.

- 1963 The Early Medieval Inscriptions, 1. Kabul Inscription of Shāhi Khiṅgāla, *Epigraphia Indica*, 31-1, 44-47.

Siudmak, J.

- 1989 Early Stone and Terracotta Sculpture, *Art and Architecture of Ancient Kashmir*, (ed.) Pratapaditya Pal, Bombay, 41-56.

静谷正雄

- 1978 インド仏教碑銘目録, 法蔵館, 京都.

Smith, V.

- 1906 *Catalogue of Coins in the Indian Museum, Calcutta*, 1, Oxford.

Stein, M. A.

- 1900 *Kalhaṇa's Rājataranginī: A Chronicle of the Kings of Kaśmīr*, 2 vols., Westminster.

Tucci, G.

- 1958 Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat, *EW*, 9, 279-328.

Verardi, G.

- 1977 Notes on the Afghan Archaeology, II, Ganeśa Seated on Lion: A New Śāhi Marble, *EW*, 27-3/4, 277-283.

Wink, A.

- 1990 *Al-Hind: The Making of the Indo-Islamic World, 1: Early Medieval India and the Expansion of Islam, 7th-11th Centuries*, Leiden/New York/Kobenhaven/Köln.

Yamada, M.

- 1972 Skandar Inscription of the Umā Maheśvara Image, *Archaeological Survey of Kyoto University in Afghanistan 1970*, Kyoto, 15-22.
- 1989 Hūṇa and Hepthal, *Zinbun: Memoirs of the Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University*, 23, 79-113.